HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	偽ディオニシウス・アレオパギタの「神秘神学」
Author(s)	大出, 哲
Citation	基督教学, 1, 20-24
Issue Date	1966-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45797
Type	article
File Information	1_20-24.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

偽ディオニシウス・アレオパギタの『神秘神学』

大出哲

一、『天上位階論』(De caelesti hierarchia)、『教会位階論』(De ecclesiastica hierarchia)、『神名論』(De divinis nominibus) というやや大きい論文、『神秘神学』(De mystica theologia) という要約的な論文、および十通の書簡には、使徒行伝 XVII, 34 に出てくるアレオパゴスの裁判官ディオニシウスの名前が著者名として付けられている。たしかに、『第七書簡』二節における・キリストの御死去のさいの太陽の蝕についての叙述、『神名論』三章二節における・聖母マリアの御遺骸についての叙述、パトモス島に流された使徒ヨハネに宛てた『第十書簡』、これらは、この一群の著作があのディオニシウスによって書かれたという印象を与える。この印象は、十六世紀にいたるまで著作者たちを支配し、この著作群があのアレオパギタの裁判官の手になるという説に力を与え続けてきた。

二、この著作群は、五三三?年のコンスタンティノープル宗教対談において、セヴェルス派の異端によって、はじめてディオニシウス・アレオパギタ (Dionysius Areopagita) という名称で引用されて以来、ディオニシウスの真正の作として多くの著作者たちに受け容れられて来た。その根強さは、ディオニシウス・アレオパギタの名をもつ著作群が偽作であると主張したルターとエラスムスが、十六世紀にパリー大学神学部によって断罪されたほどである。しかし偽作説は次第に力を得、十九世紀に至ってシュティグルマイルやコッホが、『神名論』と新プラトン主義者プロ

クロス（410〜485）の『悪の実体について』(De malorum subsistentia) の類似性を内容的言語的に明らかにして以来、確定的なものとなった。この著作群は、五世紀の終り乃至は六世紀の始めに現われたのである。

三、この外来の思想は、アウグスティーヌス主義およびスコラ学の影響を受け、修道生活の実践と結びついて時代とともに改変されていった。本稿は、『神秘神学』、とくにその中心的部分である第一章をとりあげ、神学の発展にともなう改変の過程を素描するものである。

四、『神秘神学』注解の皮切りとなったのは、東方教会のマキシムス・コンフェッソル（五八〇頃〜六六二）である。モーセの闇への歩み入り（一章三節）についてのかれの注解はこうである。「かれは触れられなく見られない〔神の〕精神のうちに存することとなった。……そして、不知と〔いっさいの認識の〕休止によって……まったく認識されえないものと……合一され……何も認識しないことによっていっさいを認識した。」このように、かれの注解はほとんど原典の精神に立っているように思われる。

五、西欧においては、ディオニシウス・アレオパギタの注解ははやくから行なわれていたが、それはもっぱら『天上位階論』に向かっていた。しかし、『神秘神学』の注解が始められたのは、十二世紀にはいってからである。ちょうど、神に導くものは認識 (cognitio) なのか、それとも、情感 (affectus) なのか、という問題が論争されていた頃である。

六、最初の注解者は、サン・ヴィクトルのリカルドゥス（一一七三歿）である。かれはモーセの闇への歩み入りをこう解釈する。「モーセは黒雲のなかへと歩み入る。そのとき、人間の精神は、あの測り知れない神の光によって呑み込まれ、最高の自己忘却によって麻痺される。そのけっか、知られているものと経験されているものの不知と忘却が、以前には知られていないものとそれまでは経験されていないものの開示と知解に和合するのである。なぜなら、共に同時に人間の知性が、一方では神的なものへと照明され、他方では人間的なものに対して覆われるからである。」モ

ーゼの闇への歩み入りは、神の不可認識ではなくて、地上の事物の不可認識にすぎない。それゆえ、ついに霊魂は、情感において神と合一するにいたる。神の直視が可能であるということは、まったく非アレオパギタ的である。

七、ヴィクトル学派から、続いでヴェルチェソのトマスが現われる。「神秘的な言葉のいただきへとわれわれを導かれよ」（一章一節）が、聖書の源泉である永遠なみことばの観想へと関連づけられる。みことばは、いっさいの被造物の範型と「神学の奥義」（一章一節）とを端的に絶対的に不動に包含する。この範型のうちに、知性は、神を思弁的に（speculative）認識する。この観想の下位の段階に対して、雲の闇のなかにおける神との合一がそびえる。この合一は、情感（affectus）によって生じる。情感は、いわば精神の尖端であり、火花（scintilla）であり、神との合一の場所である。

八、このトマスに、カルトゥジオ会士・バルマのフーゴー（十三世紀末）が続く。かれは、「いっさいの存在しないものと存在するものとを捨て去りなさい」（一章一節）から観想の段階を導き出す。「存在するもの」は、神の精神のうちにある被造物の永遠な範型を意味する。これの観想が最下の段階であり、知性における観想と言われる。これの上位に位するものが愛の情感（affectus amoris）による観想であるが、これはさらに下位の先行的黙想（meditatio praevia）と上位の合一的叡智（sapientia unitiva）とにわけられる。先行的黙想の対象は、「存在しないもの」、すなわち、眼に見える被造物のうちには存在しないところの、三位一体、神の諸名称、天使などであり、これらの弁思的観想によって愛の情感にまで導かれる。そして、ついに情感の希求（affectus desiderium）によって合一的叡智に到達するのである。こうして、アレオパギタに対立して、現実的な直視、彼岸における至福直観の先取に到達することになる。

九、知性に対する情感の優位は、さらに、ボナヴェントゥラに持ち込まれる。かれは、アレオパギタの指図「知性的な働きを捨て去りなさい」（一章一節）に従う。神と一致するためには、知性にではなく希求（desiderium）に、教師にではなく新郎に訴えるべきである。霊的上昇の母である祈りに身を委ね、熱烈な愛によって十字架につけられたキ

リストへと呑み込まれねばならない。この脱自的恍惚の模範は、アルヴェルナ山の静寂の中でキリストと一致したフランシスコである。こうして、アレオパギタにフランシスコの精神が読みこまれ、かれのアルヴェルナ登攀がアレオパギタ理解の道標となる。

十、情感に力点を置く流れに対して、知性に力点を置く流れが現われる。この源がロベール・グロッステスト（一一七五～一二五三）である。かれは、知性の「見る現実態」(actus visivus) と「見る可能態」(potentia visiva) とを区別し、観想の段階においても知性に意義を与えようとする。「知性的な働きを捨て去りなさい」（一章一節）は、「見る現実態」にのみ関係する。しかし、「見る可能態」すなわち「霊的に見る能力」までが無為におかれるわけではない。「見る可能態」にはただちに、神の光りを受け容れる適応性 (aptitudo) がつくり出される。こうした状態において神は覆いなしに現われ、みずからの光で知性を照明する。こうして闇は、神との一致に達する通過段階にすぎないこととなる。

十一、アルベルトゥス・マグヌス（一一九三?―一二八〇）にあっては、知性はさらに積極的な役割を演じる。知性は神の像であり、この像が恩寵の獲得によって新たにされるとき、精神は現実に神を模倣する。したがって、アレオパギタのあの勧告、「知性的な働きを捨て去りなさい」（一章一節）には、限定が付けられなければならない。捨て去らなければならないのは、われわれの本性に合致する知性的な働き、つまり、感覚的な事物に源をもつ認識だけなのである。神の光から出てわれわれのうちに存するものは、われわれを神へと上昇させる媒介となり、知性がその推進力となる。

十二、トマス・アクイナス（一二二六頃～一二七四）は、『神秘神学』の注解を著していない。しかし、かれの知性と情感とを綜合する立場は、十五世紀の神秘家カルトゥジオ会士ディオニシウス（一四〇二乃至一四〇三～一四七一）において開花する。

知性には積極的な意義が与えられ、神との合一という最高段階にも適用される。したがって、「知性的な働きを捨て去りなさい」（一章一節）というあの勧告は、被造的な対象に対してのみ関係づけられる。この勧告の実践によって、ひとは「いっそうすぐれた仕方で合一される」（一章一節）。この合一は知性的能力の尖端によってなされる。こうして、知性によって口火が切られた神との合一は、つづいて、情感によって完成される。

十三、ついで、カルトゥジオ会士ディオニシウスの友人、ニコラウス・クザーヌス（一四〇一～一四六四）を挙げなければならぬ。

人生の目的は、「矛盾するものどもが一致する単純性へと自分を高める」ことである。じつに、「反対の一致」は「神秘神学への上昇のはじめ」なのである。かれにあっては、キリストは「知性的な希求の終局」なのである。

十四、マルスィリオ・フィチーノ（一四三三～一四九九）にあっては、上昇の導き手は愛（amor）である。愛は霊魂を神へと呼びもどす合一性である。この合一性は霊魂の尖端であり、知性よりも上位の部分である。神との合一は、知性を神に向けてつくりかえる。つくりかえられた知性は霊魂全体に滲透し、霊魂はいわば知性として働くことになる。

なお詳細は、「カトリック神学」第七号（上智大学出版部）を参照していただきたい。